

グループ発達へのまなざし

— 測定の可能性についての実証的研究 —

岩 崎 和 美

**A look at group development:
An empirical study on the measurement possibility**

Kazumi IWASAKI

奈良大学大学院研究年報 第16号別刷 平成23年3月

**Reprinted from Annual Reports
of The Graduate School of Nara University
No. 16, March 2011**

グループ発達へのまなざし

— 測定の可能性についての実証的研究 —

岩 崎 和 美*

A look at group development:
An empirical study on the measurement possibility

Kazumi IWASAKI

要 旨

本研究は、グループ発達過程についての研究である。グループ発達のプロセスに関する研究は、さまざまな観点から行われており、さまざまな理論、モデルが提唱されている。中でも、Bennis & Shepard (1956) の発達過程モデルは、本研究と同様にBionの集団理論に基づいている、そのため、本研究と最も関係のある研究であると考えている。Bennis & Shepardはグループ発達を2つの大きな位相（第一位相：依存、第二位相：相互依存）と各位相の下に3つずつの合計6つの下位位相から説明しようとした。以上のことから、グループ発達過程は、先行研究の発達モデルのように、直線的な発達をたどらず、グループごとに質的・量的な違いが見られるのではないかと仮説を立て、Hafsi (1990) によって提唱されたD-グループのグループ概念に基づいた22のグループに参加した心理学系大学の学生273名（♂：156名、♀：117名）を対象に、グループセッション終了時に質問紙を実施し、グループごとにグラフに記した。比較した結果、各グループで質的、量的な違いが見られた。そのため、本研究の仮説は実証された。以上の結果から、グループは直線的な発達を必ずしもたどるものではないことが示された。

キーワード：グループ発達過程、Bion、基底的理想グループ、作動グループ

I はじめに

『三人寄れば文殊の知恵』

誰もが知っている古くからのことわざであろう。一人では何の力もない凡人であっても、三人が歩み寄り、集団になれば、文殊菩薩という識者ほどの知恵が生まれるという意味である。つまり、集団になれば、人は思っている以上の力を発揮できることが示唆されている。実際に、私たちが集団となって力を合わせることで、普段以上の力が発揮できた経験をもっているだろう。しかし、一方で「いじめ（スケープゴート）」という問題も存在している。いじめは、集団になる

平成22年9月17日受理 *奈良市スクールカウンセラー

ことで生まれるとされる問題であり、近年でも大きく社会問題として取り上げられている。そして、心理学においては、集団（グループ）は力動的なものであり、常に変化するものであるという見解がなされている。つまり、集団（グループ）とは、単なるメンバーの足し算ではなく、科学実験のように化学反応を起こし、全く別の物質へと変形するものであるという認識がなされている。では、一体、どのようなグループが『文殊菩薩のような』知恵の生まれる、完成された集団であるのだろうか。複雑とも思える変化を見せる集団はどのように完成された集団へと発達していくのであろうか。

Ⅱ 問 題

本研究は、グループ発達過程に関するものである。グループに関する研究では、グループは一人の個人のように誕生し、発達していくと考えられている。それに従って、グループ発達について幾つかの理論やモデルが提唱されてきた。Winter (1976) のモデル、Agazarian (1997, 1999) のモデル、Bennis & Shepard (1956) のモデルが有名なものとして挙げられるが、中でも本研究と最も関係があるのは、3つめのBennis & Shepardのモデルである。なぜなら、本研究と同様に、Bionの集団理論に基づいているからである。

1. Bionの集団理論

Bion (1961) によってなされたグループに関する最も基本的な発見は、あらゆるグループには、『作動グループ (Work Group, 以下WG)』と『基底的想定グループ (basic assumption Group, 以下baG)』という2つの対照的な機能的水準が存在するということである。Bionによると、ここでの『グループ』という用語は、「特殊な心的活動のみを包括するものであり、その作業に携わる人々を意味するのではない」(Hafsi訳, 1997) と定義されている。

まず、WGは、グループのメンバーが自ら「協同 (cooperation)」し、作業に不可欠な知識、訓練、経験、技能をもち、(初期のものであれ) 科学的な方法を用いて「基本的作業 (basic task)」(たとえば、治療、練習等) に没頭しているグループを形容するような心的活動である。さらに、WGの下で活動しているグループは、作業による欲求不満に対する耐性があり、「経験から学ぶこと (learning from experience)」、時間の流れと発達 (変化) を意識したり、重視したりすることによって特徴づけられる。換言すれば、WGは、現実との関係を重視し、現実原則に基づく活動である。Bionは、これらのWGの特徴が、Freud (1921) によって記述された自我の特徴に類似すると述べている。

そして、Bionによれば、グループは、常にWG活動の条件を満たしている訳ではない。WGはグループの存続や発達のために不可欠なのだが、苦痛を伴うので、グループはそれを回避しようとする。その際に、グループはWGと共存する、無意識的、衝動的、幻想に基づく1つの心的活動、すなわち「基底的想定グループ (basic assumption Group, 以下baG)」に頼る。その結果、baGはWGを阻止し、両グループ心的側面の間の力関係、すなわち「勝った方がグループを支配する」という関係が成立する。さらに、baGには、3つの異なった類型がある。すなわち、「依

存基底の想定グループ (basic assumption of dependency, 以下baD)、「闘争基底の想定グループ (basic assumption of fight/flight, 以下baF/fl)」、「つがい基底の想定グループ (basic assumption of pairing, 以下baP)」の3つである。それぞれのbaGについて詳細に論じる前に、まずそれらの主要な共通点を簡単に記述する。

すべてのbaGは一定の「基底の想定」に基づいている。グループメンバーに共有されるその基底の想定は幻想であり、リーダーシップのスタイルとそれに対するメンバーの態度、メンバー同士の関係をグループと外部との関係、グループの自己認知、グループの時間の概念、グループの基本的作業に関する考え方などの側面に反映される。また、経験から学ぶ能力の欠如、時間と発達に関する無関心という、WGとは異なった特徴も持っている。baGは、グループに属することの体験による精神病的不安に対する原始的な防衛反応とそれに伴う愚かさに特徴付けられる心的状態に相当するものである。さらに、baGの活動に参加したり、寄与したりすることができるためには、baGの内容や類型に一致した「原子価 (valency)」をもたなければならない。Bionによれば、WGにおける「協同」相当する原子価は、「基底の想定を作り出し、そしてそれを行動化していくための、グループと結合に対する個人の準備状態 (readiness)」(Hafsi訳, 1997)である。原子価については、本研究と直接関係していないため、詳細な説明は控えることとする。そして、以下が各baGの詳細な特徴である。

依存基底の想定 (baD)

baDにおけるグループの共通幻想は、グループが未熟で、他者の援助や指示がなければ何もできない、そして他者（リーダーを含む）が全知、全能であると信じることである。特徴として挙げられるのは、グループの雰囲気は無気力、不活発であり、メンバーは精神的に未熟であるかのように振舞う。そして、グループは教祖的リーダーシップを求め、縦的、また横的な関係の両方において依存する傾向が見られる。しかし、baDが支配的なグループにおいては、縦的な関係が優先される。baDグループの構造において特徴的なのは、メンバー間に意識上の相互作用がほとんどなく、各メンバーがリーダーと特別な個人的な関係を持っていると信じていることである。

闘争・逃避基底の想定 (baF/baFl)

baF/baFlグループの共通幻想は、グループの存続にとって脅威と感じられる何らかのもの（敵）が存在していると信じることである。そのため、baF/baFlの下で機能しているグループは、その敵と戦ったり、そのものから逃げたりするために集まったかのように振る舞う。したがって、敵を前に戦うにせよ逃げるにせよグループには行動（行動化）が不可欠である。一見して、グループの雰囲気は活発に見える。そして、そのグループの雰囲気を保つために、「敵は存在している」というパラノイ的なリーダーシップが不可欠となる。そのようなグループでは、個人は重視されず、集団が中心となる。グループ内でも、競争傾向があり、攻撃性が特徴として挙げられる。敵を想定、意識することが多くなり、スケープゴート現象が見られるグループでもある。

つがい基底的想定 (以下baP)

baPグループの共通幻想は、単なるつがいの存在だけではなく、その存在によって導かれる幻想であり、「グループの存続と維持がこれから生まれてくるであろうリーダー (救世主) による」もの、そしてその救世主を期待することである。つがい (サブグループ) がグループの中心であり、目標としての希望と期待をグループは抱いている。そして、グループの中心であるつがいによって生み出されるであろうと期待している未登場のリーダーシップをグループは求めている。さらに、baPグループの特徴として、未来性思考が挙げられる。これは、WGとは違った意味での未来性であり、現実に基づいていないことが特徴である。そして、このbaPに支配されているグループは、成員間が親密である。そして、このグループでは平等と正義感が重視される。

以上の3つのタイプのbaGがあり、その一つが常にWGと共にグループには存在しており、baGとWGとのいくつかに分類された関係によって、グループ心性に大きな影響を及ぼし、グループメンバーへも無意識的な影響を与えているとBionは考えた。以上のような理論的背景のもとにBennis & Shepardのモデルは提唱された。

2. Bennis & Shepardのモデル

感受性訓練グループの発達における古典的研究の一つとしてBennis & Shepard (1956) の研究があげられる。彼らによると、グループ発達は二つの発達の位相からなる。第一の位相は権威関係の問題を含む位相であり、第二の位相の問題は個人的な関係に関連している。さらにこの二つの位相は、一から六まで順序付けられ各位相それぞれ三つの下位位相によって構成されている。

第一位相：依存

第一下位位相は、依存的かつ反依存的というグループ行動の二つの異なる種類によって特徴付けられる依存—逃避である。一般的に依存的な傾向を持つメンバーによって現れる。依存的行動はグループのための全体的な仕事、話し合いのためのテーマの説明を提供したり、ルールを決めたり、報酬を分配したりする仕事をリーダーやトレーナーに期待することから成る。共通の目的を探すと試みがなされるが肯定的な結果は得られない。グループの内部に安全性を必要とするのが一般的である。例えば、リーダーはメンバー自身の興味のある当たり障りのない事実を提供することによって、彼らに安心を与える。グループの雰囲気は無力、怠惰、退屈 (いたづら書きやあくび)、知性化によっても特徴付けられる。グループの依存的行動はトレーナーの行動に対する理由やその要素を調べるようグループを導く。その結果、彼のグループにおける支持、指導、リーダーシップの提供は自発的なものではないと判断されたとき、反抗や批判の根拠として提供されるのである。

第二下位位相はリーダー (トレーナー、セラピスト) に対する敵意とグループ内の不和によって特徴付けられる、反依存—闘争である。リーダーが依存的なグループの欲求を打ち破り続けると、グループは彼/彼女をグループの進歩において最も無駄なものであり、最もひどいダ

メッセージを与えるものとして見始める。それゆえ、この位相においてリーダーはメンバーの依存の必要性や期待に対し肯定的かつ積極的に反応することが期待される。したがって、もし、リーダーがこのことに対し消極的であったり失敗したりした場合は罰するということがグループの活動として理解されており、この位相は彼らにとって最もストレスに満ちた不愉快な位相といえる。

この位相の他の特徴として、グループはどのように機能するべきか、またグループの様相、リーダーシップの必要性ということに関して発生したサブグループ間による不一致が挙げられる。たいてい、他のサブグループとの間に不一致が生じたとき、グループは議長を選んだり、グループの日程を決めたり、あるいは、グループが大きすぎてスムーズに機能できないというのを口実に、各委員会に分割し、組織化しようという試みがなされる。この分割は (Bion, 1961) リーダーシップの不在を引き起こし、このサブグループの不一致によってその不在を埋めることを許さないという状況が続くことを助長するのである。

第三下位位相は解決—カタルシスとして言及されている。この位相でのポイントを挙げるとするならば、グループにおいて最も顕著な力は破壊的な力であるということである。しかしながらこの位相におけるグループには、建設的な動きが見られるようになる。グループの無力感や孤独感といった感情は減少し、相反するサブグループ (依存—反依存) においてはお互いに支えあうようになる。そしてトレーナーの認知はいくつかの変化を体験し始める。トレーナーは、今、認知したものを先行する二つの位相のような弱さやごまかしだけでなく、寛大なものとして認知するようになるのである。グループレベルにおいて見られるいくつかの変化としては、トレーナーの介入をあからさまに拒んだり、無視したりするが、密かに注目しているということが挙げられる。Bennis & Shepard (1976) によると、この位相はFreud (1922) によって述べられている原始群、特に兄弟と原始的父というグループ間の関係によって特徴付けられているいくつかの特色を含む。

第二位相：相互依存

権威への没頭が第一位相における中心のテーマであったが、相互依存と愛情の分配が第二位相におけるグループの基本的な問題となる。既述したようにこれから述べる位相も三つの下位位相 (第四、第五、第六) からなる。

第四下位位相は魅惑—逃避の状態によって特徴付けられる。先の位相において体験した逃避はまだグループの記憶の中で生きている。グループは楽しく凝集性がありリラックスした気分を感じている。そしていろいろな試みに対する緊張感も増加するかもしれないが、これはすぐに冗談や笑いに頼ることによって吹き飛ばされてしまう。グループにおける支配的雰囲気は寛容であり、親密であり「甘く軽い」ものとなる。「グループはお互いの違いを縫い合い、お互いの傷を癒し合い、調和的な雰囲気を維持するために努力しあう」。第二位相におけるこの下位位相の初期の段階は「全体としての」グループの魅惑によって特徴付けられ、最後に自分自身の下位集団に対し魅惑を感じるようになる。このことは再び第一位相に起こった初期の分裂を導くのである。

第五下位位相におけるグループは、全体としてのグループに幻滅し、下位集団というグループの分裂を目立たせ、強調させる。Bennis & Shepardは魅惑喪失—闘争としてこの下位位相に言及している。第二位相もまた分裂によって必要とされる新密度の度合いに基づいているという特徴がある。「反個人的」なメンバーはお互いの関係に深入りすることに対し抵抗し、団結する。「過剰個人的」なメンバーはむしろ個人的な信仰や「無条件の愛」を必要とし求めあうことによって団結する。これらうわべの相反する「サブグループは共に親密性が侮りを生むことを恐れているのである。」

最後の第六下位位相は合意的了解である。Bennis & Shepardは最後に続くものとして、この第六下位位相において観察されたグループの行動を要約した。メンバー達は「我々は強い」「彼らは悪い」という分裂に頼ることなしで自分達の持つ違いを許容することができるようになる。下位集団において葛藤はまだ存在するが、ここにおける葛藤は感情的な問題よりもむしろ事実上の問題について関係している。合意においては単なる全員一致よりも合意的な討論やダイアログが要求される。メンバー達は圧倒されることなく、脅かされることなく自分達の複雑な状況やグループ過程やグループ（発達、時間、評価）の他の側面にも気付くようになる。構成員はよりお互いに興味を持つ。このことはグループ内のコミュニケーションやグループ間のコミュニケーションを促進し、お互いの思考や感情、行動についてより深い理解を導く。更にここで生まれた一連の個人的な期待は第一下位位相において観察されたステレオタイプ化された役割期待とは異なる。

Bennis & Shepardは第一位相から第二位相における変化について、権威の強調から愛着の強調に変化しているだけではなく、役割（リーダーとしての役割、メンバーとしての役割、下位集団としての役割等）の強調から人格の強調へと変化していると主張している。この進展は「メンバー間の合意を検討し達成する方法の発達」に関する過程としてBennis & Shepardの2人の筆者のよって明らかにされたグループ発達の論証である。注目すべきことは、後述しているように、この進展はいつでも成し遂げられているわけではないということである。依存—逃避の位相を決して超えることのないグループもあるのである。このグループ発達モデルは多くの研究者によって否定されてきた。そしてBennis & Shepardが彼等の研究を発表して以来、他の研究者によって完成させられたのである。

本研究はBennis & Shepard (1956) と同様に、Bionの集団理論に基づいているが、本研究で用いているグループ概念は、Bennis & Shepardとは異なる。本研究におけるグループは、Hafsi (1990) によって提唱されたD-グループである。

3. HafsiによるD-グループ

本研究では、Hafsi (1990) よって提唱されたD-グループを対象としている。D-グループの一般的な概念を以下に述べる。

D-グループの概念

D-グループの根源はフランス学派（CEFFRAP）の代表であるAnzieu（1984）とその同僚らによる「groupe de diagnostic」あるいは「診断グループ」である短期精神分析思考のT-グループにある。Hafsi（1990）はその「Diagnostic Group」をD-グループと省略して用いた。D-グループは、「二次過程（意識的）」だけではなく、「一次過程（無意識的）」も取り扱っていくという点でT-グループとは異なっており、解釈の意味からグループ内の力動的な変化と、グループの「今・ここ」（here-and-now）における隠れた意味をも同時に把握することを認める点にある（Anzieu, 1984）。

D-グループの構造

グループ構成は（原則としてはお互い見知らぬ）8～16名のメンバーと1名のトレーナー（以下、Tr）、2名の観察者からなる。セッションは、平均して5～20のセッション（1回80分）を行うクローズグループであり、参加者のカテゴリ（学生、専門家等）とニーズにより、3日から2週間にわたって行われる短期的グループである。参加者の性別に関して、D-グループでは男性と女性の人数がほぼ同数であることが望ましいとされている。メンバーには、各自が自分の社会的アイデンティティを隠し、「今、ここ」の自分のみを出すように勧められる。グループの形態を決めるのはグループである。多くのグループ方法と同様に、D-グループの場合も、メンバーは、Trを含めて、円になって座り、2人の観察者はグループの外で座る。それは、Trはグループの一員であり、観察者はグループに参加しないことを伝えるための設定である。D-グループのメンバーを選択する基準としては特定のものがなく、本人のグループへの参加に対するモチベーションと言語的表現力のみが重視される。

D-グループの規則

D-グループでは、初回にTrによって告げられる二つの基本的な「規則」がある。それは「復元規則」と、「禁制原則」である。

「復元規則」では、今・ここで言いたいこと、感じたことを「自由に」表現でき、また他の参加者のそれに耳を傾けることが求められる。しかし、これはメンバーが何を言ってもよいという意味ではなく、「自由」は、グループに選択されたテーマとその進み方、メンバーのお互いに対する気持ち、Trに対する気持ち、要するにグループ全体に関する表現に限ることである。復元規則には、セッション以外のところで、グループあるいはサブグループがグループについて話した内容を次回のセッションで報告する義務も含まれる。これは、欠席者についても同様であり、欠席者は次回のセッションにおいて欠席理由を報告しなければならない。グループに関するあらゆる事柄はグループの所有であり、それを持ち出すことは原則として禁じられており、もしそれを犯した場合には、必ずグループへその所有物を返還しなければならないという前提が存在している。

「禁制規則」は、個人精神分析と同様に、Trも、観察者も、グループメンバーとはいっさい、私的関係をもってはいけないということを主張する規則である。つまり、Trは、グループとの

セッション外での接触を避け、セッションにおいても、Trは今・ここにおけるグループに関すること以外に参加しない。もし、何らかの理由のために、そのようなことが生じた場合、Trはそれをグループに報告する必要がある。さらに、禁制規則には、セッションで行われたり、起こったり、表現されたりした内容をグループと関係のない人に言わないこと、あるいは「守秘義務」が含まれる。守秘義務はTrと観察者だけでなく、グループ全体に対して要求されるものである。

D-グループの目的

D-グループの目的は、集団心理学に対する、特に経験的な知識を提供することによって、心理学的現象に対する参加者の理解を深めること、また、鋭敏化を目指すことである。参加者は心理学的現象を単に体験するのではなく、対象としてのグループを体験し、それについて考え、理解していく過程を経ることによって、心理学的現象を理解するための技術を身に付けることができる。一方的に教育されるのではなく、自ら集団現象を発見するように導かれる。

本研究は、グループの発達過程に関する研究である。既述したように、グループに関する研究は様々に行われており、グループ発達に関しても様々な理論やモデル、概念が提唱されている。しかし、Bennis & Shepard (1956) をはじめとするグループ発達過程モデルに共通していることは、グループの発達過程は「直線的で固定されたものである」という点である。それらのモデルは現在では、グループプロセスに関しての研究の中でも支配的なモデルとして考えられている。しかし、Bion (1961) の集団理論に基づくと、集団は直線的な発達を遂げるとは明記されていない。また、筆者が観察者として参加したグループにおいても、発達過程はグループによって異なっていたという経験から、直線的な固定された段階をグループは本当に歩むのだろうかという疑問を持った。

以上のことから、本研究ではBionの集団理論の観点から、D-グループを観察し、回収したデータを用いて、対象のグループの発達過程を明らかにする。そして、グループ間の質的・量的な違いを明らかにし、グループは果たして直線的な発達を遂げるのかを検証することが本研究の目的である。

本研究では、以上の理論的背景から、次のような仮説を立てることができる。「グループ発達過程は、必ずしも直線的なものではないだろう。」そして、「グループ発達過程は、グループ間に、量的かつ質的な違いが見られるであろう。」という2つの仮説である。以上の仮説を検証するため、以下のような方法を用いた。

Ⅲ 方 法

1. 対象

本研究の対象は、心理学系の大学に通う学生、273名（男性：156名、女性：117名）が参加した、大学の講義の一環で行われるD-グループである。彼らは、男女の区別なく、学籍番号順に8

名～14名に振り分けられた。

2. 構造

セッションはX年Y月から平成X+2年Y+3月にかけて実施された。原則として週一回、連続した2コマの講義時間(90分間×2)が使用された。1コマを1セッションとし、休憩を挟んで計2セッションが行われた。そして、1グループにつき6セッションが行われた。

また、同一の大学に在籍している学生が参加者のため、匿名の状況を創り出し、維持するために、最初のセッションのときに、アルファベット(例;A、B等)が書かれた名札を渡し、相手に見えるところに付けるように指示を与えた。

3. セッション室のデザイン

セッションは、対象の心理学系の大学の実習室において実施された。部屋の中央に、円を囲むような形でグループメンバー(Trを含む)hyの椅子が、そして、その外側に観察者(2名)の椅子が配置された。席順はあらかじめ決められており、参加者用の椅子の背もたれには、それぞれの学籍番号、およびA・B・C…とアルファベットを表示する用紙が貼られ、椅子の上にはそれぞれのアルファベットの名札が置かれた。席順は、グループが自発的に席替えを行う場合を除いて、常にトレーナーを含め、アルファベット順で決められていた。参加者(メンバー)への指示は、すべてトレーナーによって行われた。

4. セッションの流れ

参加者は指定された日時にセッション室に集合し、それぞれの学籍番号が表示された席に着き、名札をつけてトレーナーの入室を待つ。トレーナーと観察者が入室、着席し、トレーナーからセッションの開始が告げられた。「セッションは始まっている」というトレーナーの発言以降をそれぞれのセッションの開始時間とした。

各セッションの終了後に、トレーナーからメンバー全員に質問紙が配布され、実施し、その日のうちに回収した。また、セッションの終了後にトレーナーと観察者の間で逆転移等の問題についてディスカッションするための時間が設けられた。

5. 尺度

本研究で用いた尺度は以下の2つの尺度である。基底的想定尺度は、各セッション終了後に実施、その日のうちに回収した。原子価測定尺度は、グループ構造を設定する際に使用したため、グループが開始される以前に実施、回収した。

基底的想定尺度 (baG尺度)

セッション終了ごとにメンバーに基底的想定尺度(baG尺度)を実施した。baG尺度は、各セッションのグループ心性を測定するための尺度で、全37項目から構成されている。基底的想定尺度を作成するために、Bionを含む幾人かの研究者の理論的かつ臨床的研究に基づいて、ま

ず各基底的理想グループの特性を書きとめ、そしてそれらを質問項目に書き直し、5件法尺度が作成された。Bionの理論を知っている研究者によって尺度の内容の妥当性が吟味され、信頼性も確認されている尺度である。

Ⅳ 結 果

1. 基底的理想尺度の信頼性

本研究では最初に、使用した尺度の信頼性を検証するため、信頼性分析を行った。基底的理想尺度の信頼性分析を行ったところ、Cronbach Alpha=.888という結果が得られ、本尺度の信頼性は証明された。

2. 基底的理想尺度の因子分析の結果

次に行った分析は因子分析である。基底的理想尺度の因子構造を知るため、因子分析（主因子法、バリマックス回転）を行った。その結果、Table1に示されているように、5つの因子が抽出された。

抽出された因子を構成している項目内容から判断し、以下のような結果となった。

まず、第一因子において、Table1に示されているように、「グループは盛り上がるように積極的に参加しようとしていた (Q22)」や、「グループは決めたことに積極的に参加しようとしていた (Q19)」、「メンバーはお互いから学ぶことが多かった (Q23)」などの作業中心的であり、既述したBion (1961) の概念である「作業グループ (WG)」の特徴と酷似しているため、作動グループに必要とされる【Cooperation】因子と名付けた。

次に、第二因子において、Table1に示されているように、「メンバーはお互いに攻撃的になることがあった (Q18)」や、「グループはイライラしていたときがあった (Q13)」、「グループはトレーナー (先生) に対して、腹が立っていた (Q3)」など、作業は中心ではなく、攻撃的な項目が検出され、第一因子同様、Bionの概念である「闘争基底的理想グループ (baF)」の特徴と酷似しているため、【Fight】因子と名付けた。

次に、第三因子において、Table1に示されているように、「会話は特に気の合いそうなメンバーを中心に回っていた (Q15)」や、「グループは特定の気の合いそうなメンバーを頼りにしていた (Q31)」、「グループは数人のメンバーだけで成り立っていた (Q16)」など、作業が中心ではなく、親密性と分裂に特徴付けられた項目によって構成されており、第三因子も同様に既述したBionの概念である「つがい基底的理想グループ (baP)」の特徴に酷似しているため、【Pairing】因子と名付けた。

次に、第四因子において、Table1に示されているように、「皆はグループの進め方をリーダーの役割だと思っていた (Q7)」や、「グループ内の話し合いはリーダーを中心に回っていた (Q10)」、「グループはリーダーの指示を期待していた (Q6)」など、作業中心性ではなく、リーダーに対する依存的な幻想に基づいた項目によって構成されており、この因子も同様にBionの概念である「依存基底的理想グループ (baD)」の特徴と酷似しているため、【Dependency】因子と名付けた。

Table 1：基底的想定尺度の因子分析の結果

項目		因子構造				
Factor1: Cooperation ($\alpha = .796$)		1	2	3	4	5
Q22	グループは議論は盛り上がるように積極的に参加しようとしていた。	.813	-.055	.018	-.119	.091
Q19	グループは皆で決めたことに積極的に参加しようとしていた。	.805	-.039	.019	-.009	-.041
Q21	グループは納得できるまで話し合った。	.658	.140	-.186	.054	-.045
Q23	メンバーはお互いから学ぶことが多かった。	.637	-.054	-.053	.156	-.162
Q11	グループは雰囲気や和らげようとしていた。	.626	-.260	.155	.074	.142
Q 2	グループは皆が決めたやり方に従おうとした。	.609	-.211	.140	.258	.142
Q14	グループは皆で決めた話題について、積極的に意見を述べようとした。	.581	-.055	.005	-.228	-.048
Q 1	皆はグループの雰囲気に合わせようとした。	.579	-.171	.148	.560	.141
Q 4	グループはリーダーの指示や提案に従おうとした。	.557	-.197	.253	.362	.137
Q33	グループは退屈していた。	-.551	.358	.358	.049	.211
Q35	グループはやる気がなかった。	-.542	.345	.093	.084	.267
Q30	グループは時間を有効に使おうとした。	.538	.053	-.160	.118	-.078
Q36	グループは欲求不満であった。	.519	.394	.211	.122	.289
Q25	口論に参加しようとしなかったメンバーもいた。	-.398	.201	.356	.187	.384
Q 5	グループは仲良くしようとしていた。	.220	-.064	-.022	.142	.108
Q32	グループには皆の意見が尊重されるような雰囲気があった。	.213	-.191	.051	.106	-.001
Factor2: Fight ($\alpha = .832$)						
Q18	メンバーはお互いに攻撃的になることがあった。	-.073	.867	.028	.052	-.044
Q20	グループは否定的な感情を表すことがあった。	-.197	.768	.070	-.097	-.052
Q13	グループはイライラしていたときがあった。	-.327	.745	.119	.001	.108
Q 9	グループは皮肉を言いあうことがあった。	-.063	.717	-.050	-.012	-.185
Q 3	グループはトレーナー(先生)に対して腹が立っていた。	.008	.568	.177	-.051	.191
Q28	グループの雰囲気が悪くなることがあった。	-.369	.508	.192	.244	.207
Q27	グループは攻撃的なメンバーに対してなるべく冷静になろうとした。	.119	.464	.010	.129	.290
Factor3: Pairing ($\alpha = .812$)						
Q15	会話は特に気の合いそうなメンバーを中心にまわっていた。	-.088	.115	.757	.102	.087
Q31	グループは特定の気の合いそうなメンバーを頼りにしていた。	.004	.141	.711	.278	.076
Q12	グループの話し合いの内容は個人のことが多かった。	.249	.002	.621	-.037	.114
Q16	グループは数人のメンバーだけで成り立っていた。	-.402	.156	.608	.145	.121
Factor4: Dependency ($\alpha = .774$)						
Q 7	皆はグループの進め方を、リーダーの役割だと思っていた。	-.034	.024	.207	.787	.025
Q10	グループ内の話し合いはリーダーを中心にまわっていた。	.103	.009	.052	.756	-.145
Q 8	グループはリーダーを守ろうとした。	.350	.072	.092	.598	.204
Q 6	グループはリーダーの指示を期待していた。	.125	-.113	.520	.567	.059
Q34	グループは緊張していた。	-.270	.086	.045	.447	.307
Factor5: Flight ($\alpha = .807$)						
Q17	グループはなるべく対立を避けようとしていた。	.234	-.054	-.084	.112	.728
Q24	グループは否定的もしくは批判的な意見を避けようとした。	.007	-.008	.119	.096	.654
Q29	グループはなるべく本音を言わないようにしていた。	-.203	.055	.144	.050	.654
Q26	グループは批判を言うメンバーをなるべく相手にしようとしなかった。	.006	.138	.133	-.169	.423

最後に、第五因子において、Table1に示されているように、「グループはなるべく対立を避けようとしていた (Q17)」や、「グループはなるべく本音を言わないようにした (Q29)」、「グループは批判を言うメンバーをなるべく相手にしようとしなかった (Q26)」など、作業が中心ではなく、葛藤に対して逃避的であり、この因子でも同様にBionの言う【逃避基底的想定グループ (baFI)】の特徴に酷似しているため、【Flight】因子と名付けた。

3. 各グループの基底的想定得点の変化

最後に、これまで行った分析によって得られた5つの因子 (Cooperation因子、Fight因子、Pairing因子、Dependency因子、Flight因子) によってセッションごとに因子得点をつけた。そして、各グループで5回のセッションがどのように変化したのか検証するため、セッションごとのグループ平均をグラフによって明らかにした。

Group1の基底的想定の变化

まず、Group1では、Figure1に示されているように、Fの得点 (以下、F値) の値がセッションによって大きく変化している。第一セッションでは、F値 (M=2.826; SD=.580) が最も高い。一方、Dの得点 (以下、D値) (M=2.214; SD=.403) が最も低い結果が示されている。しかし、第二セッションでは、F値 (M=3.898; SD=.466) が他の値と大きく差が開いてもっとも高い値を示しており、Cの得点 (以下、C値) (M=2.460; SD=.295) が最も低い値を示している。しかし、次の第三セッションでは、F値 (M=2.846; SD=.593) が最も高いものの、他の基底的想定との差があまり見られない。一方で、Pの得点 (以下、P値) (M=2.196; SD=.905) が最も低い結果を示している。そして、第四セッションでF値 (M=1.918; SD=.370) は、最も低

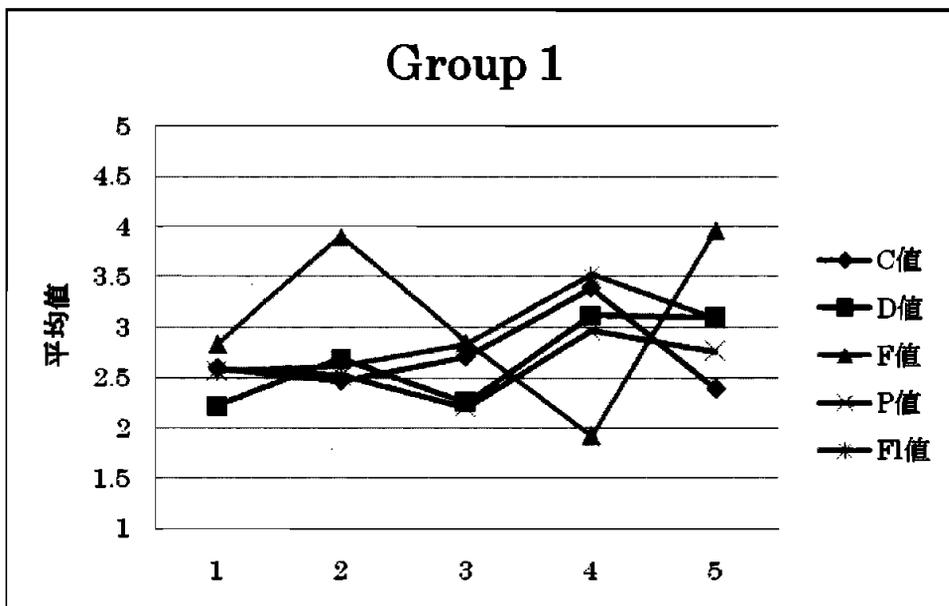


Figure1. Group1の発達過程グラフ

い値を示す結果となった。一方で、FIの得点（以下、FI値）（ $M=3.517$; $SD=.768$ ）が最も高い結果となった。最後の第五セッションでは、再びF値（ $M=3.956$; $SD=.413$ ）が最も高くなり、D値（ $M=3.085$; $SD=.606$ ）が最も低い結果となった。

Group2の基底的想定の変化

Group2では、Figure2に示されているように、すべての値が第五セッションにおいて大きく変化していることが特徴である。まず、第一セッションでは、F値（ $M=2.901$; $SD=1.433$ ）が最も高く、P値（ $M=2.288$; $SD=.454$ ）が最も低い結果となっているが、その他の値とそれほど差が見られない。第二セッションでは、C値（ $M=2.385$; $SD=.322$ ）、D値（ $M=2.383$; $SD=.430$ ）が第一セッションよりも下がっているが、第一セッション同様、最もF値（ $M=2.928$; $SD=.549$ ）が高く、P値（ $M=2.229$; $SD=.493$ ）が低い結果となっている。第三セッションでも、F値（ $M=2.846$; $SD=.493$ ）が最も高く、P値（ $M=2.288$; $SD=.454$ ）が最も低い結果を示した。そして、第四セッションでも、変わらずF値（ $M=3.142$; $SD=.556$ ）が最も高く、P値（ $M=2.057$; $SD=.587$ ）が最も低い結果を示している。そして、第五セッションでは、すべての値が増加し、C値（ $M=3.524$; $SD=.552$ ）が最も高く、D値（ $M=2.600$; $SD=.522$ ）が最も低い結果となった。

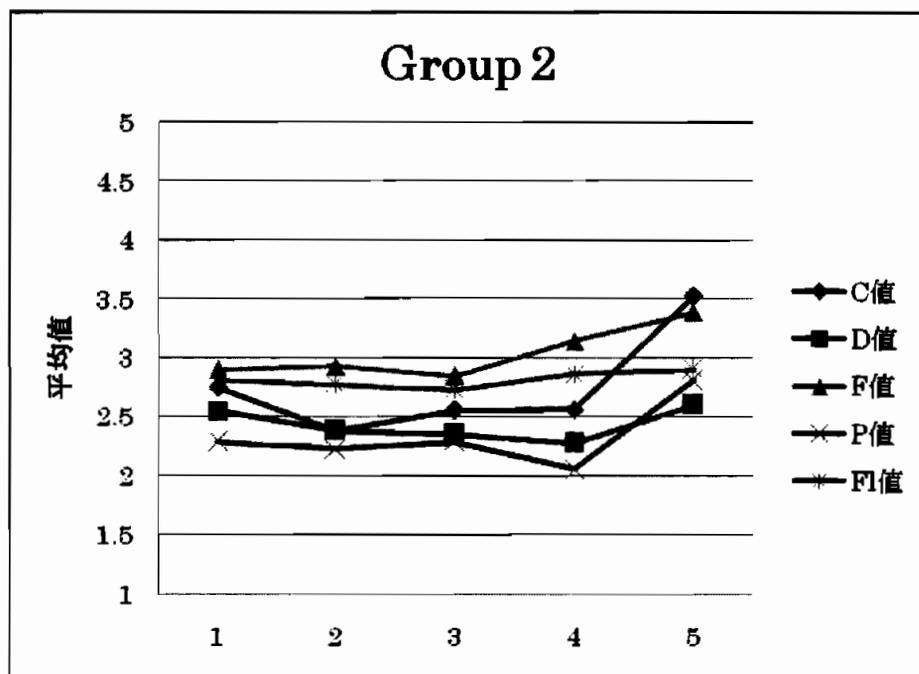


Figure2. Group2の発達過程グラフ

Group3の基底的想定の変化

Group3では、Figure3に示されているように、全セッションを通して、大きな変化の見られないことが特徴として挙げられる。第一セッションでは、FI値（ $M=2.975$; $SD=.650$ ）が最も

高く、F値 (M=2.971; SD=.790) も同程度の値を示している。そしてP値 (M=2.200; SD=.586) が最も低い結果となっている。そして、第二セッションでは、FI値 (M=2.568; SD=.581) が下がり、F値 (M=2.971; SD=.430) が最も高く、D値 (M=2.418; SD=.517) が最も低い結果となった。第三セッションでは、すべての値が同程度に集中しているが、F値 (M=2.844; SD=.671) が最も高く、P値 (M=2.386; SD=.540) が最も低い結果となっている。そして第四セッションでは、F値 (M=2.532; SD=.648) が下がり、FI値 (M=2.977; SD=.971) が最も高く、P値 (M=2.363; SD=.875) が最も低い結果が得られた。最後の第五セッションでは、再びF値 (M=3.114; SD=.708) が上がり、最も高い結果となり、P値 (M=2.425; SD=.533) が低い結果となった。

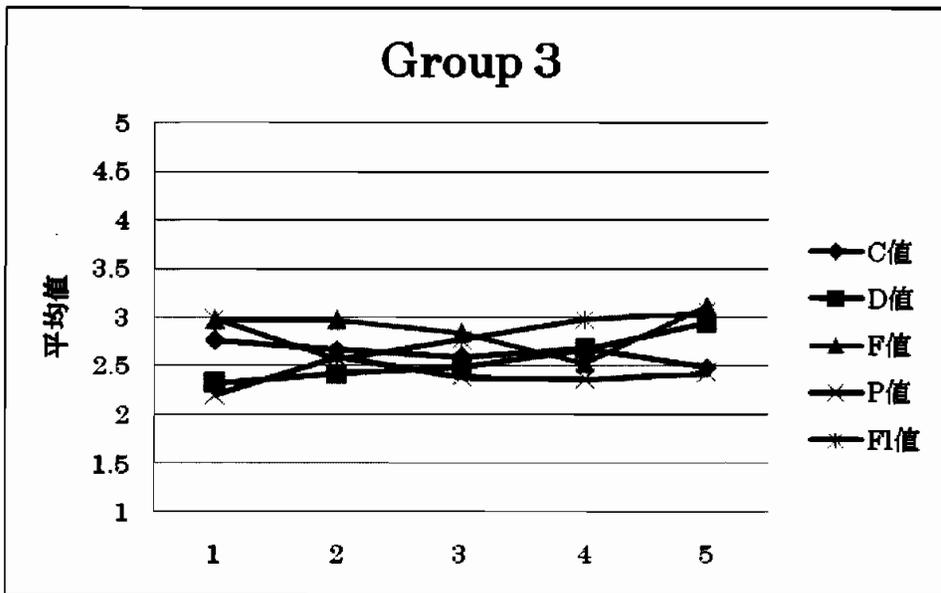


Figure3. Group3の発達過程グラフ

Group4の基底的想定の変化

Group4では、Figure4に示されているように、第一セッションでのF値の高さと、第二セッションでのP値の低さ、第四セッションでのFI値の増加が特徴である。まず、第一セッションでは、F値 (M=3.545; SD=.348) が他の値から大きく差をとって最も高い結果となり、P値 (M=2.090; SD=.709) が最も低い結果が示されている。第二セッションでは、F値 (M=2.961; SD=.367) が最も高い結果ではあるが、第一セッションほど差はあいておらず、最も低い結果となったP値 (M=1.795; SD=.705) が他の値との差が開いている。第三セッションでは、すべての値が中央に集中している結果が得られたが、最も高い値はC値 (M=2.960; SD=.351) であり、最も低い値はD値 (M=2.600; SD=.513) であった。第四セッションでは、FI値 (M=3.340; SD=1.582) が最も高い結果となり、P値 (M=2.295; SD=.640) が最も低い結果となった。最後の第五セッションでは、FI値 (M=2.818; SD=.355) が下がり、F値 (M=2.985; SD=.329) が

最も高くなり、第四セッションと同様にP値 (M=2.340; SD=.539) が最も低い結果となった。

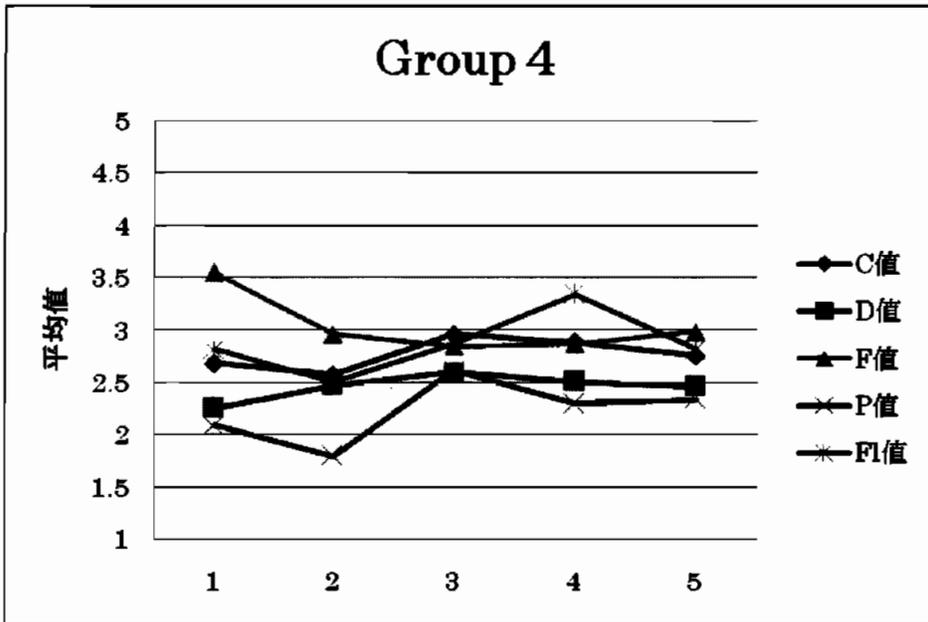


Figure4. Group4の発達過程グラフ

Group5の基底的想定の変化

Group5では、Figure5に示されているように、第三セッションにおいて、他のグループでは低い傾向にあるP値が一番高くなるという結果が得られたことが特徴である。第一セッションでは、F値 (M=3.166; SD=.407) が最も高く、D値 (M=2.163; SD=.320) が最も低いという結果が示されている。第二セッションでは、F値 (M=2.758; SD=.658) が下がり、FI値 (M=3.708; SD=.655) が上がったため、最も高い値を示してあり、C値 (M=2.456; SD=.618) が最も低い値であった。そして、第三セッションでは、P値 (M=3.958; SD=.909) が増加し、最も高い結果となった。一方で、D値 (M=2.966; SD=.602) も他のセッションより高い数値であるが、最も低い結果となっている。その後、第四セッションでは、P値 (M=2.795; SD=.864) は急に下がり最も低く、F値 (M=3.818; SD=.777) が増加したため最も高くなった。最後の第五セッションでは、FI値 (M=3.708; SD=.655) が最も高く、P値 (M=1.895; SD=.493) が最も低い結果となった。

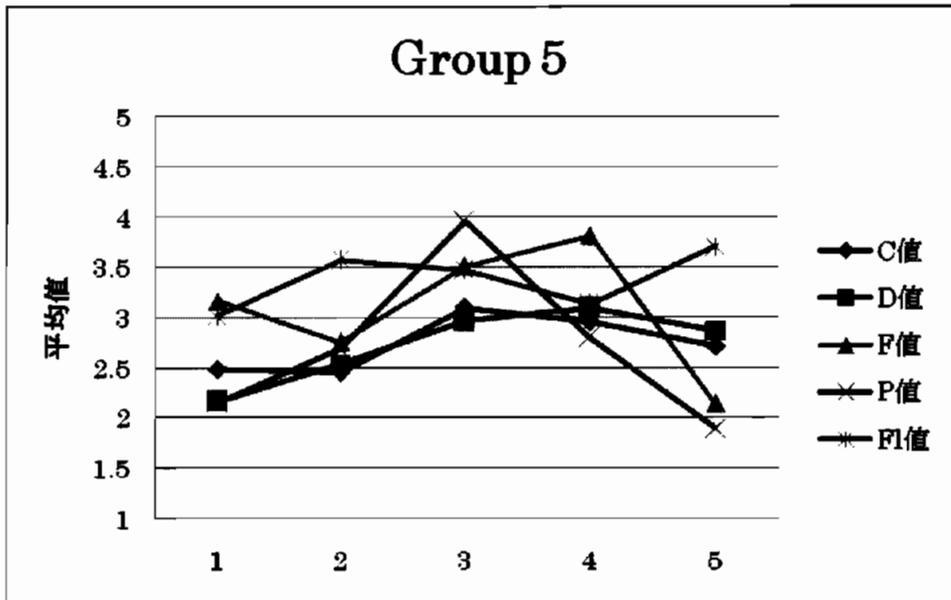


Figure5. Group5の発達過程グラフ

Group6の基底的想定の変化

Group6では、Figure6に示されているように、F値が全セッションに亘って値が高いことが特徴として挙げられる。第一セッションでは、F値 (M=3.392; SD=.345) が高く、D値 (M=2.553; SD=.366) が低いという結果が得られているが、他の値との差はさほど見られない。

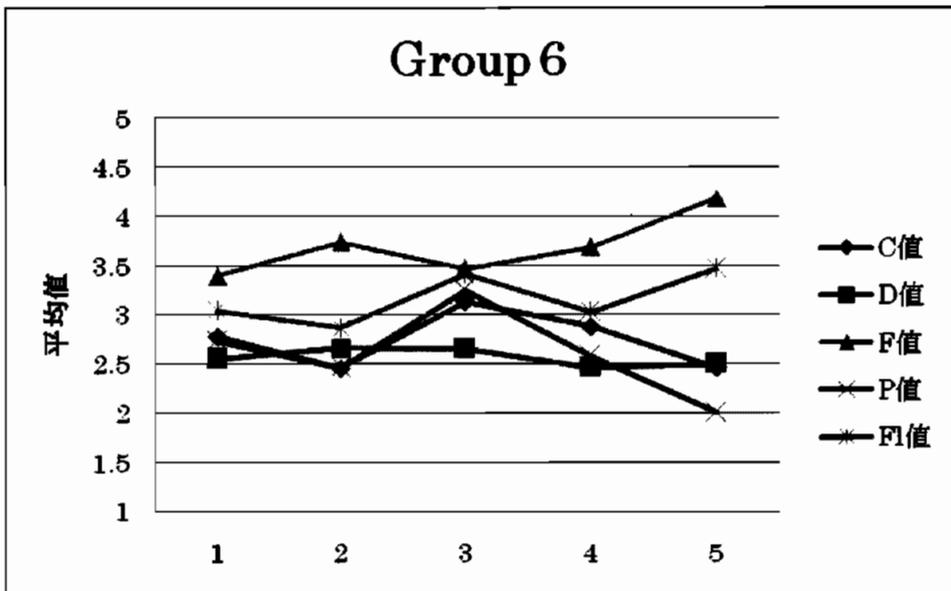


Figure6. Group6の発達過程グラフ

しかし、第二セッションになると、F値 (M=3.736; SD=.345) が他の値と比べて、飛びぬけて高い値を示しており、C値 (M=2.451; SD=.280) が最も低い値を示している。第三セッションでは、F値 (M=3.467; SD=.546) が高いものの、他の基底的理想のFI値 (M=3.409; SD=.831)、P値 (M=3.250; SD=.689) が増加するため、差は第二セッションほど見られなくなった。一方、D値 (M=2.645; SD=.465) が最も低い値を示している。しかし、第四セッションでは、再びF値 (M=3.685; SD=.682) が増加し、他の値と大きく差をあけて最も高い結果を示した。一方で、D値 (M=2.460; SD=.611) が最も低い結果を示している。最後の第五セッションでは、FI値 (M=3.468; SD=.589) も増加しているが、F値 (M=4.183; SD=.693) はさらに増加し、最も高い値を示し、P値 (M=2.000; SD=.559) は値が減少し、最も低い結果となった。

Group7の基底的理想の変化

Group7では、Figure7に示されているように、最高値の入れ替わりが激しく、C値が第三セッションにおいて一番高い数値を示していることが特徴として挙げられる。第一セッションでは、F値 (M=3.408; SD=.631) が最も高く、P値 (M=1.666; SD=.403) が最も低い結果が得られた。第二セッションではFI値 (M=3.160; SD=.704) が最も高く、P値 (M=2.339; SD=.858) が最も低い結果となった。第三セッションでは、C値 (M=3.182; SD=.342) が最も高く、P値 (M=1.916; SD=.547) がもっとも低い結果が得られた。第四セッションでは、D値 (M=2.569; SD=.599) が最も低く、FI値 (M=3.519; SD=.599) が最も高くなった。そして、第五セッションでは、数値は変化しているものの、FI値 (M=3.173; SD=.806) が最も高く、D値 (M=2.415; SD=.574) が最も低い結果となった。

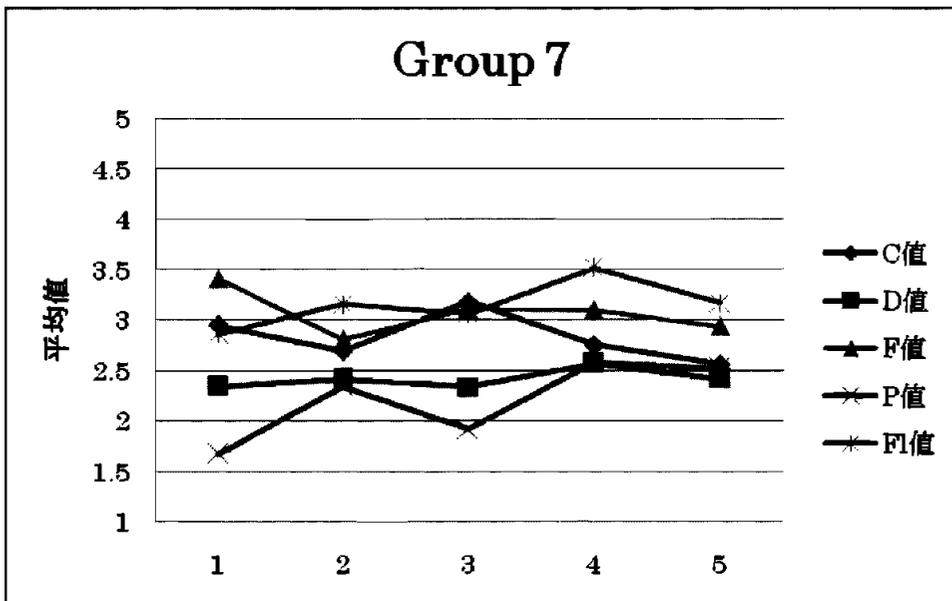


Figure7. Group7の発達過程グラフ

Group8の基底的想定の変化

Group8では、Figure8に示されているように、F値とP値の基底的想定の変化が激しいことが特徴として挙げられる。第一セッションでは、F値 (M=3.194; SD=.664) が最も高く、D値 (M=1.963; SD=.366) が最も低いという結果が得られた。第二セッションでは、FI値 (M=2.840; SD=1.068) が最も高く、D値 (M=2.327; SD=.483) が最も低い結果であったが、他の基底的想定との大きな差は見られない。第三セッションで、F値 (M=3.636; SD=.569) が増加し最も高い結果となり、P値 (M=2.431; SD=.814) が減少傾向にあり、最も低い結果となった。第四セッションでは、P値 (M=2.090; SD=.550) はそのまま下がり続け、最も低い結果となり、F値 (M=3.415; SD=.692) は最も高い結果となった。第五セッションでは、P値 (M=3.840; SD=.735) が急増し、最も高い結果となり、D値 (M=3.090; SD=.659) が最も低い結果となった。

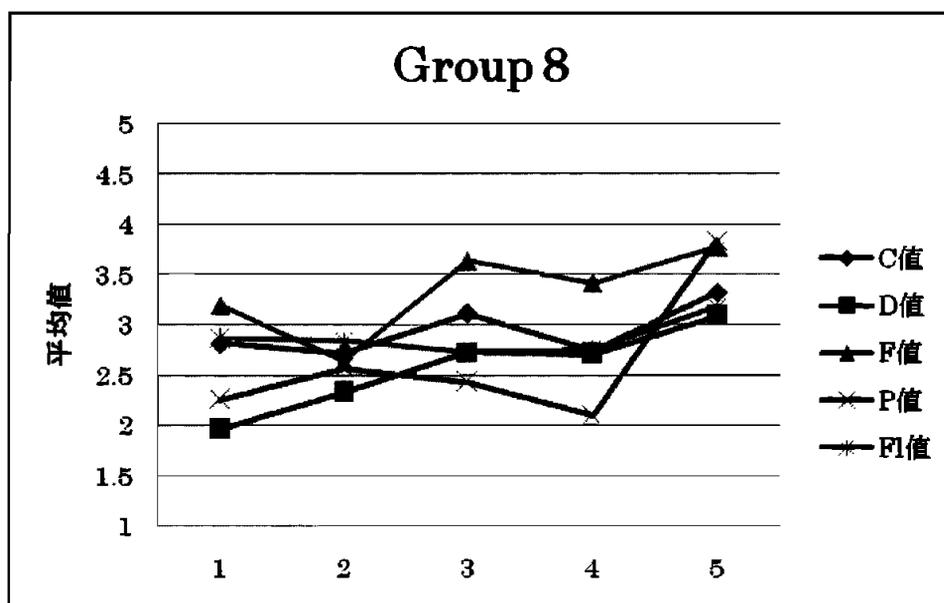


Figure8. Group8の発達過程グラフ

Group9の基底的想定の変化

Group9では、Figure9に示されているように、第一セッションでのF値の値が非常に高いことが特徴として挙げられる。第一セッションではF値 (M=4.057; SD=.660) が平均で、4以上の値を示して最も高い結果となっている。一方でC値 (M=2.450; SD=.317) が最も低い値であった。第二セッションでは、F値 (M=2.671; SD=.495) は減少し、FI値 (M=3.100; SD=.625) が最も高い値であった。P値 (M=2.125; SD=) が最も低い結果であった。第三セッションでは、F値 (M=3.728; SD=.611) が再び最も高い結果であり、C値 (M=2.305; SD=.332) が最も低い結果であった。そして、第四セッションにおいても、F値 (M=3.984; SD=.628) が最も高く、C値 (M=2.305; SD=.332) が最も低い結果が得られた。第五セッションでは、F値 (M=3.157;

SD=.501) が減少し、P値 (M=3.225; SD=.785) が最も高く、D値 (M=2.140; SD=.411) が最も低い結果が得られた。

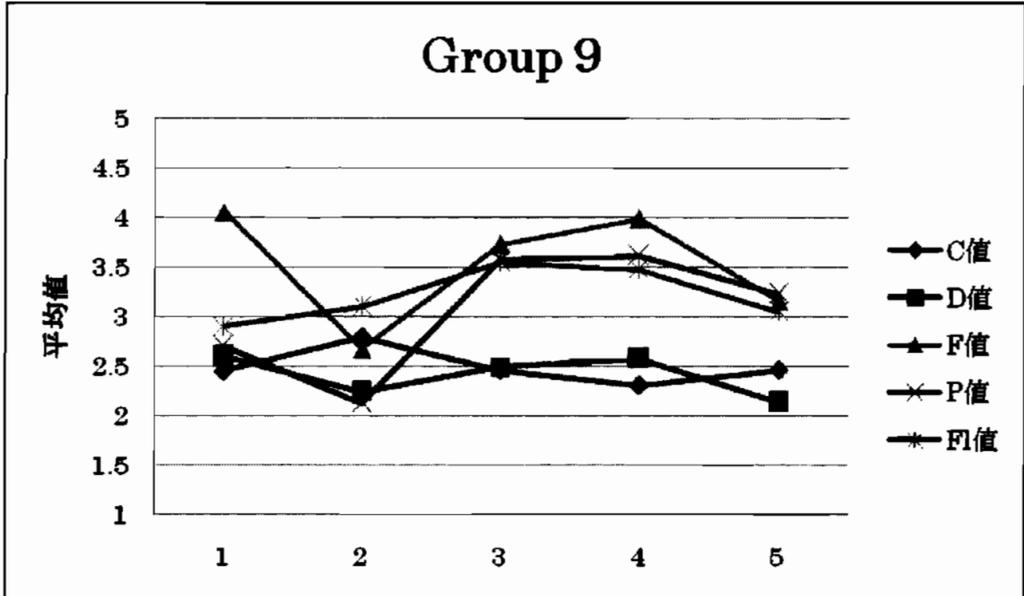


Figure9. Group9の発達過程グラフ

Group10の基底的想定の変化

Group10では、Figure10に示されているように、最終的に第五セッションにおいて値が集中することが特徴として挙げられる。第一セッションでは、F値 (M=3.333; SD=.457) が最も高く、P値 (M=1.722; SD=.384) が最も低い結果となった。第二セッションでは、差が狭まっただけのものの、F値 (M=2.936; SD=.500) が最も高く、P値 (M=2.027; SD=.491) が最も低い結果となった。しかし、第三セッションでは、FI値 (M=2.968; SD=.431) が最も高い値を示し、D値 (M=2.225; SD=.310) が最も低い結果を示した。その後、第四セッションでは、F値 (M=2.946; SD=.457) が再び最も高くなり、D値 (M=1.975; SD=.406) が最も低い結果となった。そして、第五セッションではC値 (M=2.986; SD=.456) が最も高くなり、D値 (M=2.466; SD=.424) が最も低い結果を示した。

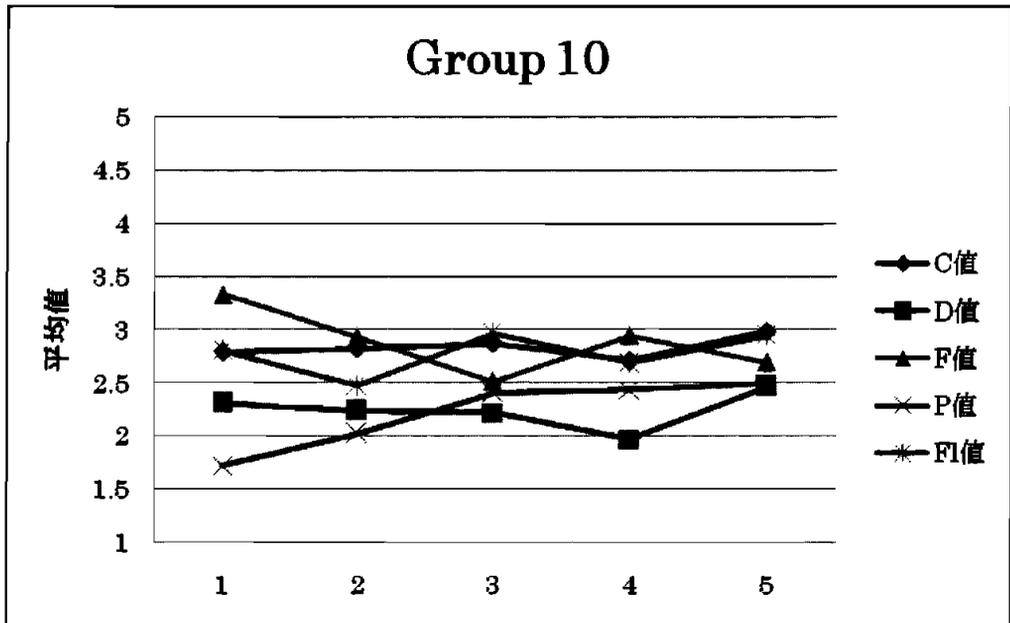


Figure10. Group10の発達過程グラフ

Group11の基礎的想定の変化

Group11では、Figure11に示されているように、全セッションを通して高い数値を示しているF値が、第二セッションにおいては低い数値を示し、全セッションを通して低い数値を示しているD値が第二セッションにおいては高い数値を示していることが特徴である。第一セッション

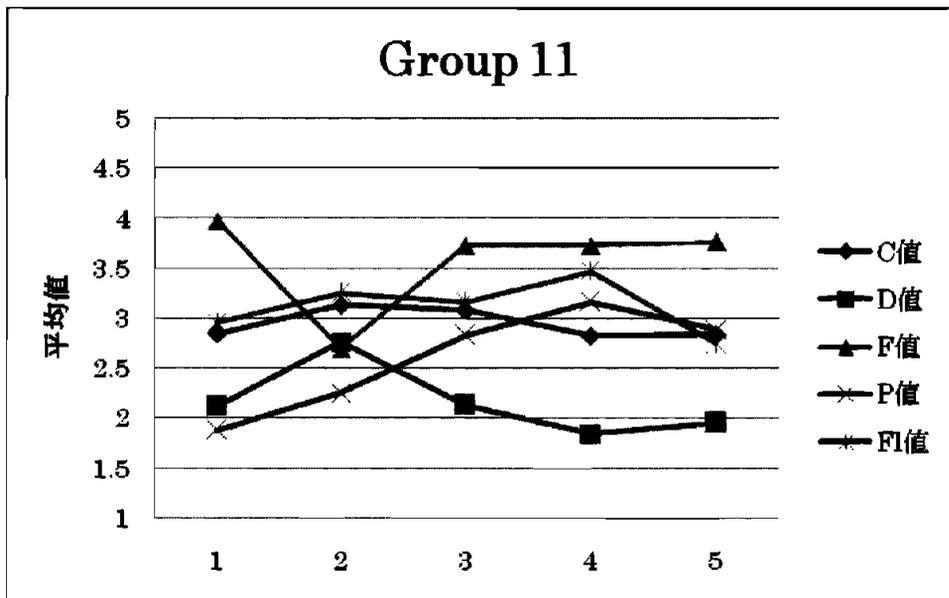


Figure11. Group11の発達過程グラフ

ョンでは、F値 (M=3.971; SD=.648) が最も高く、P値 (M=1.875; SD=.603) が最も低い結果となった。第二セッションでは、F値 (M=2.700; SD=.483) が低下し、FI値 (M=3.250; SD=.424) が最も高い値を示し、P値 (M=2.250; SD=.656) は増加するが、最も低い結果となった。第三セッションでは、F値 (M=3.730; SD=.437) が再び増加し最も高くなり、一方D値 (M=2.133; SD=.412) が最も低い結果となった。第四セッションは、F値 (M=3.730; SD=.486) が最も高くなり、D値 (M=1.844; SD=.536) が最も低い結果となった。そして、第五セッションでも同様に、F値 (M=3.761; SD=.479) が最も高い値を示し、D値 (M=1.950; SD=.475) が最も低い値を示した。

Group12の基底的想定の変化

Group12では、Figure12に示されているように、全体的にF値が高い傾向にあることが特徴であると言える。第一セッションでは、F値 (M=3.662; SD=.700) がもっとも高く、D値 (M=2.200; SD=.638) が最も低い値を示している。第二セッションでは、F値 (M=3.259; SD=.807) が低下するが最も高く、P値 (M=1.818; SD=.603) が最も低くなっている。第三セッションにおいては、F値 (M=3.271; SD=.487) が最も高く、P値 (M=2.075; SD=.457) が最も低い結果となっている。第四セッションでは、F値 (M=3.476; SD=.597) が最も高く、P値 (M=2.450; SD=.497) が最も低くなった。第五セッションでは、F値 (M=3.873; SD=.442) が最も高く、P値 (M=2.222; SD=.491) が最も低い結果となった。

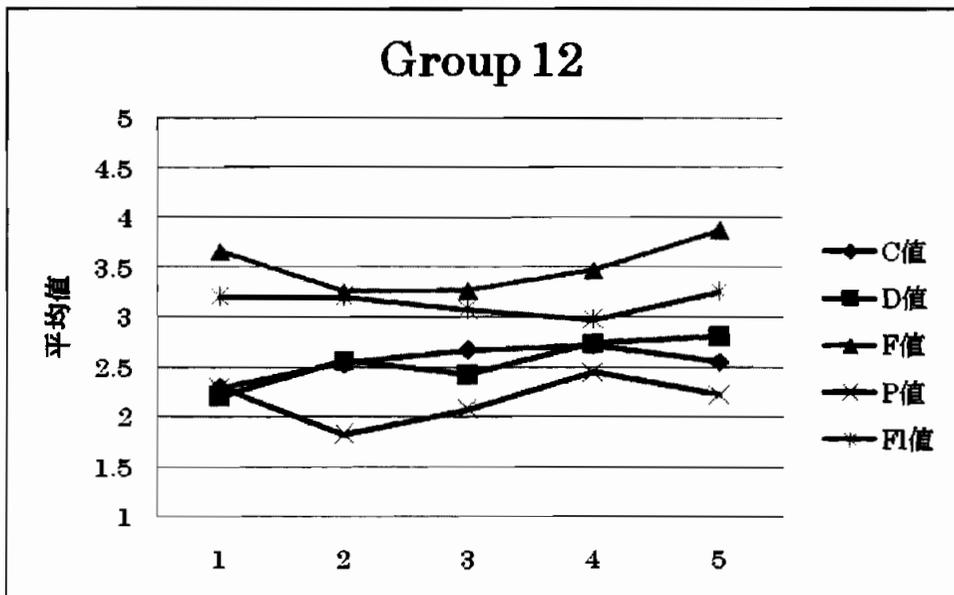


Figure12. Group12の発達過程グラフ

Group13の基底的想定の変化

Group13では、Figure13に示されているように、第四セッションですべての値が大きく変化

することが特徴として挙げられる。第一セッションでは、F値 (M=3.457; SD=.679) が最も高く、D値 (M=2.020; SD=.393) が最も低い値を示している。第二セッションでは、F値 (M=3.014; SD=.458) が低下するものの、最も高い値であり、D値 (M=1.900; SD=.509) が最も低い値を示している。第三セッションでも、F値 (M=3.298; SD=.346) が最も高く、D値 (M=1.854; SD=.465) が最も低い結果となっている。第四セッションでは、F値 (M=2.415; SD=.435) が大幅に低下し、FI値 (M=2.931; SD=.895) が最も高く、D値 (M=2.400; SD=.732) ・P値 (M=2.386; SD=.528) とともに大きく増加するが、P値が最も低い結果となった。第五セッションでは、FI値 (M=3.204; SD=.568) が増加し続け、最も高い値を示し、D値 (M=2.400; SD=.438) が最も低い結果となった。

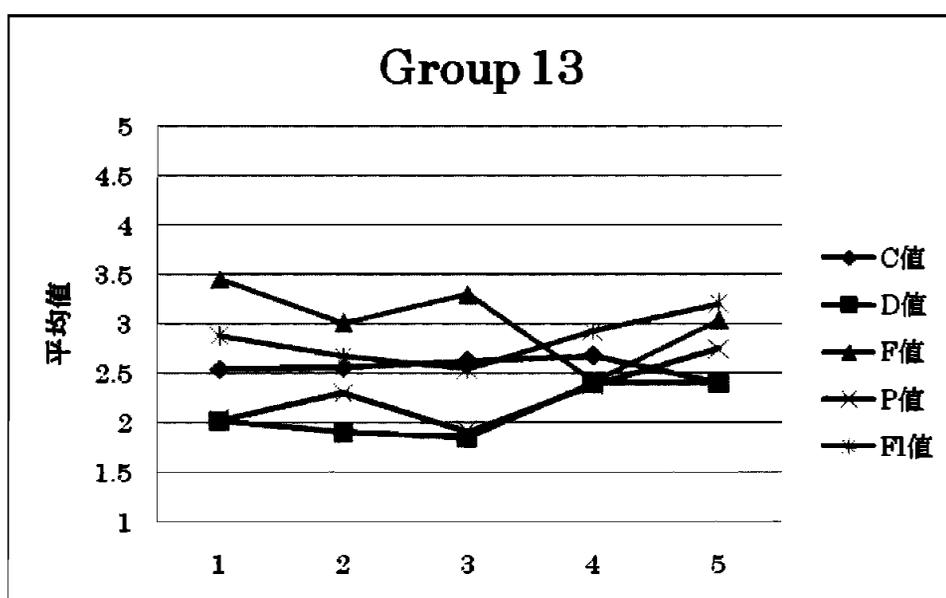


Figure13. Group13の発達過程グラフ

Group14の基底的想定の変化

Group14では、Figure14に示されているように、FI値が半分以上のセッションで高い値を示していることが特徴であるといえる。第一セッションでは、FI値 (M=3.583; SD=.695) が最も高い値を示しており、C値 (M=2.263; SD=.392) が最も低い値を示した。第二セッションでは、FI値 (M=3.388; SD=.695) が相変わらず最も高く、C値 (M=2.256; SD=.298) が最も低い。しかし、第三セッションでは、F値 (M=3.875; SD=.407) が増加し、最も高い値となり、D値 (M=2.000; SD=.501) が低下したため、最も低い結果となった。そして、第四セッションでは、F値 (M=3.875; SD=.407) は低下し、FI値 (M=3.375; SD=.779) が最も高い結果となり、D値 (M=2.275; SD=.584) は増加するものの最も低い結果となった。最後の第五セッションでは、FI値 (M=3.343; SD=.399) が最も高い値を示しているが、一方では、P値 (M=2.062; SD=.764) が低下したため、最も低い結果となっている。

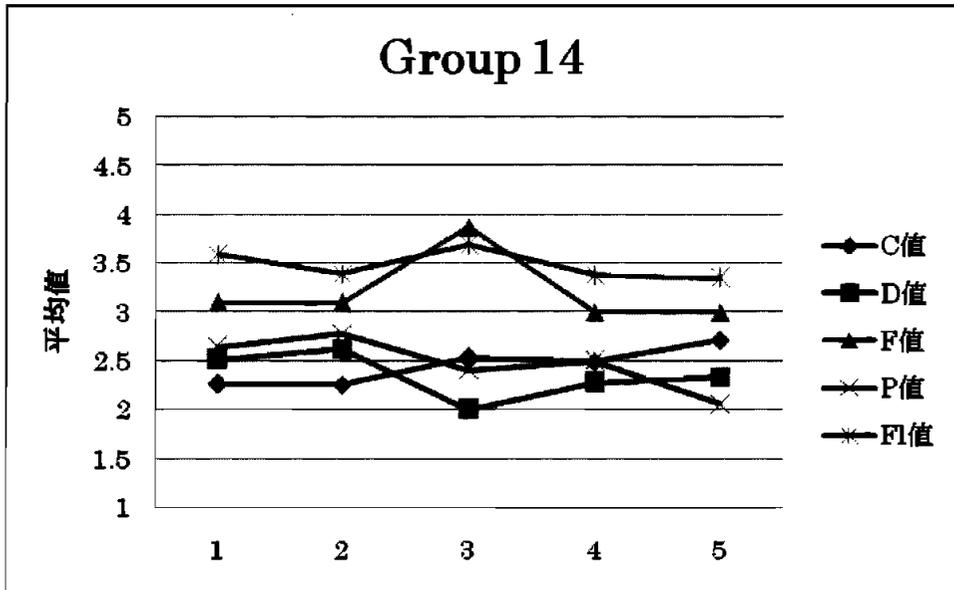


Figure14. Group14の発達過程グラフ

Group15の基底的想定の変化

Group15では、Figure15に示されているように、各セッションにおいて数値の入れ替わりがあることが特徴として挙げられる。まず、第一セッションでは、F値 (M=2.901; SD=.607) が最も高いが、他の数値とそう大差がみられない。一方、P値 (M=2.307; SD=.541) が最も低い値を示している。第二セッションでは、FI値 (M=3.166; SD=.668) が増加して最も高い値を

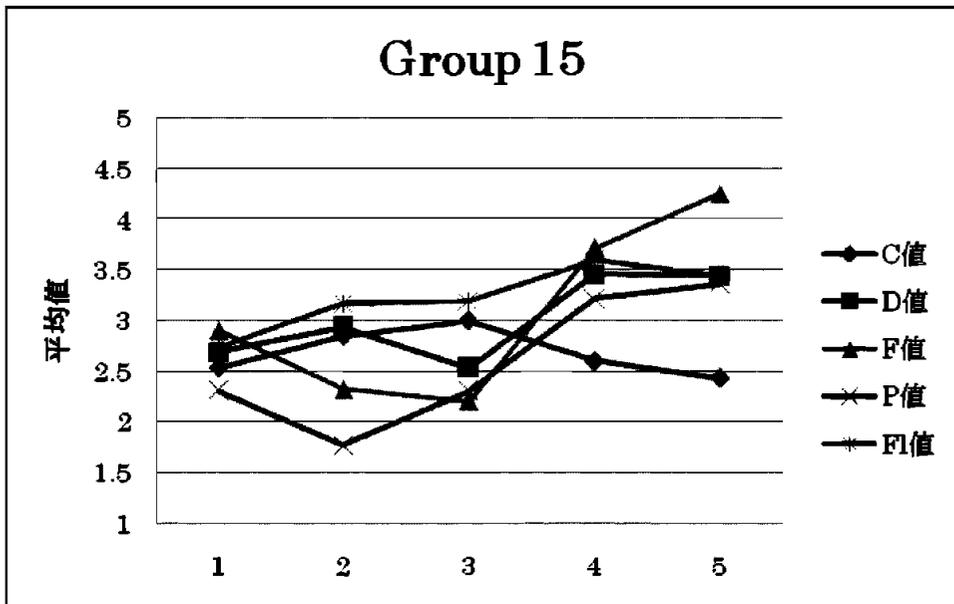


Figure15. Group15の発達過程グラフ

示しており、P値 (M=1.770; SD=.505) が第一セッションよりも低下して最も低い値となっている。しかし、第三セッションでは、F1値 (M=3.194; SD=.807) が最も高い結果を示している一方で、F値 (M=2.206; SD=.539) が最も低い結果が示された。そして、第四セッションでは、F値 (M=3.714; SD=.638) が増加し、最も高くなり、第三セッションで二番目に高かったC値 (M=2.598; SD=.818) が最も低い結果となった。そして、第五セッションでは、F値 (M=1.254; SD=.673) はそのまま増加し続け最も高い結果を示し、D値 (M=2.430; SD=.212) が最も低い結果となった。

Group16の基底的想定の変化

Group16では、Figure16に示されているように、P値が第三セッションにおいて数値が大きく減少していることが特徴として挙げられる。第一セッションでは、F1値 (M=3.089; SD=.568) が最も高く、P値 (M=2.339; SD=.486) が最も低い結果となっている。第二セッションでは、F1値 (M=3.375; SD=.594) が最も高く、C値 (M=2.625; SD=.226) が最も低い値を示した。しかし、第三セッションでは、F値 (M=3.530; SD=.614) が最も高く、P値 (M=2.000; SD=.379) が大幅に減少した結果、最も低い結果となった。そして、第四セッションでは、F1値 (M=3.303; SD=.547) が最も高くなり、P値 (M=2.321; SD=.513) が最も低い結果となっている。第五セッションでは、F値 (M=3.285; SD=.581) が再び最も高い値を示し、P値 (M=2.312; SD=.414) が最も低い値を示した。

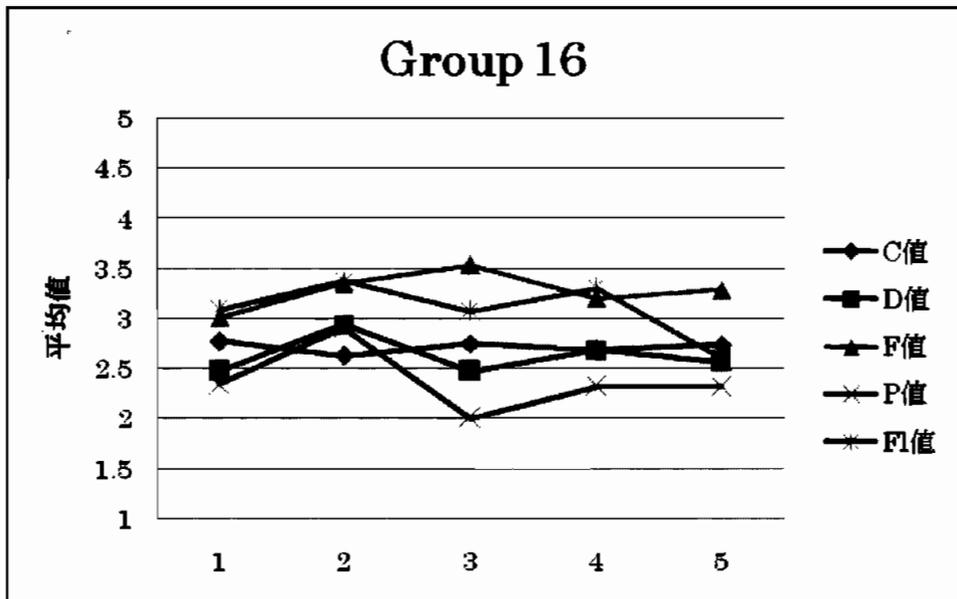


Figure16. Group16の発達過程グラフ

Group17の基底的想定の変化

Group17では、Figure17に示されているように、第三セッションにおいて、すべての数値が

増加しており、その中でも、P値が大幅な増加を示していることが特徴である。第一セッションでは、F値 (M=3.419; SD=.572) が最も高く、P値 (M=2.066; SD=.644) が最も低い結果となっている。第二セッションでも同様に、F値 (M=3.619; SD=.664) が最も高く、P値 (M=2.214; SD=.508) が最も低い。しかし、第三セッションでは、P値 (M=4.346; SD=.633) が大きく増加し、最も高い値を示しており、D値 (M=3.215; SD=.465) も増加しているが、最も低い結果となっている。そして、第四セッションでは、P値 (M=2.250; SD=.416) が減少し、F値 (M=3.244; SD=.541) が最も高くなり、D値 (M=2.114; SD=.601) が最も低い結果を示した。最後の第五セッションでは、FI値 (M=3.071; SD=.696) が最も高く、D値 (M=2.300; SD=.601) が最も低い結果となっている。

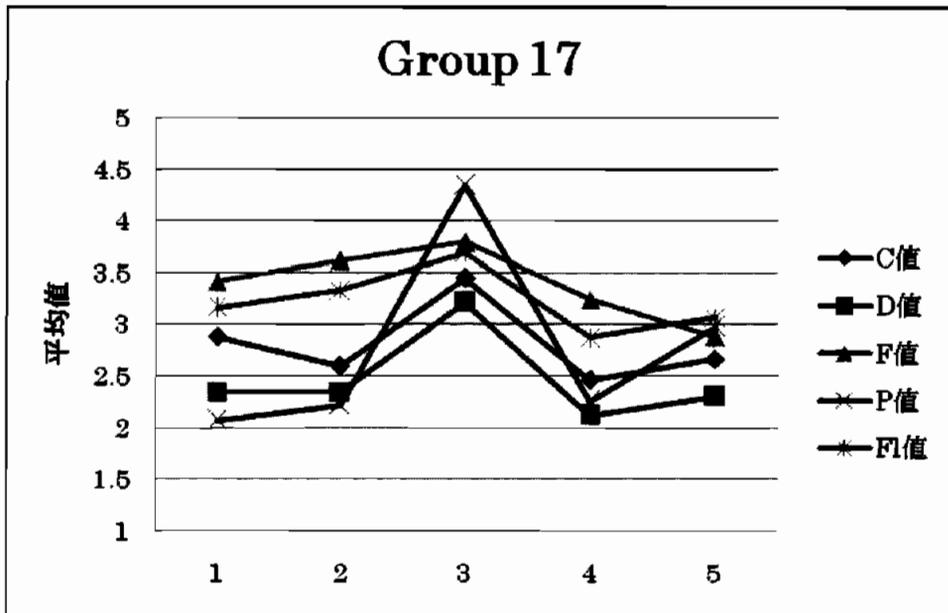


Figure17. Group17の発達過程グラフ

Group19の基底的想定の変化

Group19では、Figure18に示されているように、第二セッションにおいて、F値が増加し、第三セッションにおいて、F値・P値が減少しており、第四セッションにおいて、P値が増加していることが特徴として挙げられる。第一セッションでは、F値 (M=2.961; SD=.578) が最も高く、D値 (M=2.327; SD=.621) が最も低い値を示している。第二セッションでは、F値 (M=3.402; SD=.502) が最も高く、D値 (M=2.433; SD=.686) が最も低い結果を示している。第三セッションでは、FI値 (M=3.187; SD=.512) が最も高く、P値 (M=2.208; SD=.689) が最も引く値を示している。そして、第四セッションでは、FI値 (M=3.208; SD=.838) が最も高い値を示しており、P値 (M=2.666; SD=.709) が増加したため、D値 (M=2.416; SD=.593) が最も低い結果を示している。最後の第五セッションでは、FI値 (M=3.020; SD=.405) が最も高く、D値 (M=2.250; SD=.519) が最も低い結果であった。

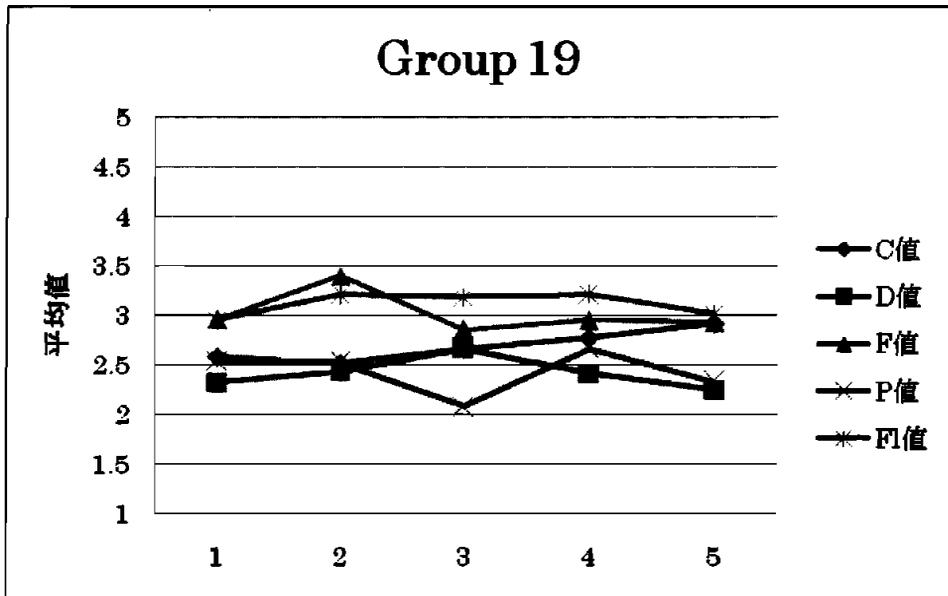


Figure18. Group19の発達過程グラフ

Group20の基底的想定の变化

Group20では、Figure19に示されているように、第一セッションでは最も高かったFと最も低かったD値が、第五セッションにおいて、D値が増加し、F値が低下したため、同程度の数値を示す結果になったことが特徴として挙げられる。第一セッションでは、F値 (M=3.254; SD=.761) が最も高く、D値 (M=1.800; SD=.481) が最も低い結果を示している。第二セセツ

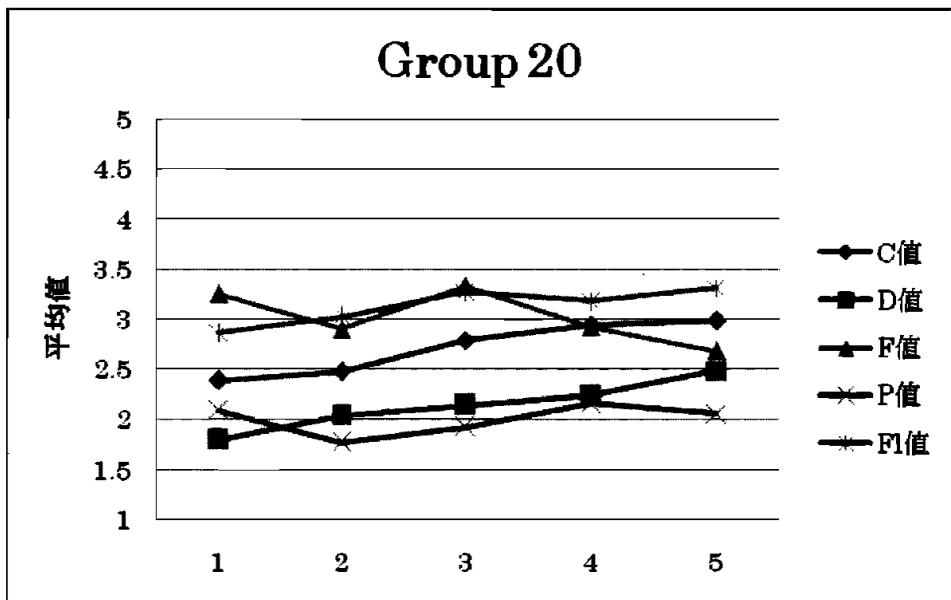


Figure19. Group20の発達過程グラフ

ションでは、F1値 (M=3.025; SD=.923) が最も高く、P値 (M=1.775; SD=.362) が最も低い結果であった。第三セッションでは、F値 (M=3.328; SD=.499) が最も高い値を示しており、P値 (M=1.925; SD=.677) が最も低い値となっている。第四セッションでは、F値 (M=2.922; SD=.328) が低下し始め、F1値 (M=3.181; SD=.501) が最も高い結果となり、P値 (M=2.159; SD=.752) が最も高い結果となった。第五セッションでは、F1値 (M=3.312; SD=.489) が最も高く、P値 (M=2.062; SD=.414) が最も低い結果となった

Group21の基底的想定の変化

Group21では、Figure20に示されているように、第二セッションで、F値が大きく減少し、また、D値が大きく増加しており、全体の値が集まっていることが特徴として挙げられる。第一セッションでは、F値 (M=3.298; SD=.462) が最も高く、D値 (M=1.800; SD=.489) が最も低い結果を示してしる。第二セッションでは、F値 (M=2.809; SD=.396)、F1値 (M=2.791; SD=.350) が同程度で最も高い値を示しており、P値 (M=2.020; SD=.432) が最も低い値を示した。第三セッションでは、F値 (M=3.558; SD=.444) が最も高い結果となり、C値 (M=2.414; SD=.363) が最も低い結果を示した。第四セッションでは、F値 (M=3.368; SD=.477) が最も高い結果を示し、P値 (M=2.375; SD=.527) が最も低い結果を示した。最後の第五セッションでは、F値 (M=3.623; SD=.527) が他の値と大きく差が開いてもっとも高い値を示し、P値 (M=2.000; SD=.536) が最も低い値であった。

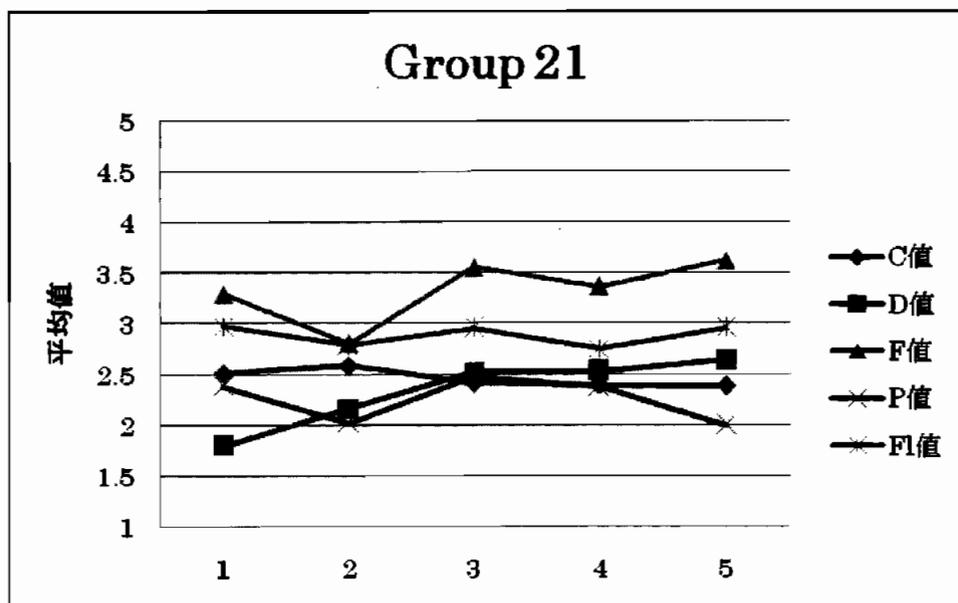


Figure20. Group21の発達過程グラフ

Group全体の基底的想定の変化

Group全体では、Figure21に示されているように、どの基底的想定も直線的な変化を逃げて

いることが示されている。第一セッションでは、F値 (M=3.274; SD=.707) が最も高く、P値 (M=2.253; SD=.657) が最も低い結果であった。第二セッションでも、F値 (M=3.064; SD=.678) が最も高く、P値 (M=2.298; SD=.732) が最も低い結果となった。第三セッションにおいては、F値 (M=3.246; SD=.677) が最も高いものの、D値 (M=2.449; SD=.557) が最も低くなるという結果が得られた。第四セッションでは、FI値 (M=3.143; SD=.812) が最も高くなり、D値 (M=2.531; SD=.680) が低い結果が得られた。最後の第五セッションでは、F値 (M=3.253; SD=.798) が再び高くなり、P値 (M=2.574; SD=.754) が低くなるという結果が得られた。

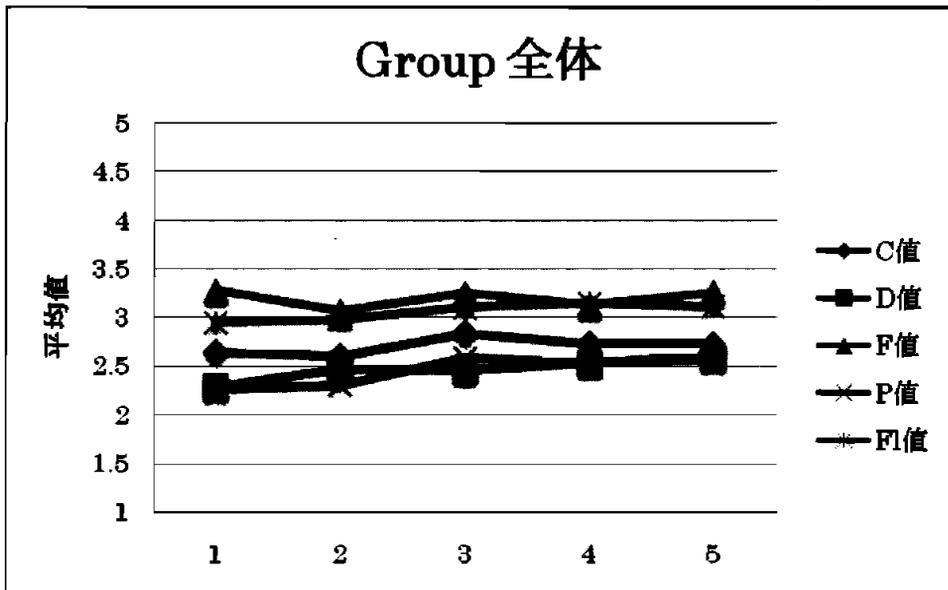


Figure21. Group全体の平均グラフ

V 考 察

第一研究では、問題を述べたのちに、「グループの発達過程は固定された直線的な発達をたどるものではないであろう」、「グループ発達過程は、グループ間に量的・質的な違いが見られるであろう」、という二つの仮説をたてた。そして、基底的理想尺度を用いて、分析を行い、5つの因子を抽出し、因子得点をグラフ化することにより各グループの発達過程を明らかにした。

問題では、グループ発達に関するBennis & Shepard (1956) のモデルをレビューした。そのモデルをBion (1961) の集団理論の観点から解釈した結果、まず、トレーナーに何とかしてもらいたいという欲求が特徴として挙げられる依存基底的理想が支配的なグループ心性として表れ、次に、トレーナーに対する攻撃性が特徴として挙げられる闘争基底的理想が現れる。グループへの依存が満たされなくなった結果、グループから逃げたいという欲求がメンバーに生まれることに挙げられる逃避基底的理想が示されるようになる。その後、グループはメンバー個人への関心が

高まり、つがい基底的理想が支配的になり、最終的に作動グループに到達するとされている。グループの発達は以上の過程をたどるとされている。また、発達過程は停滞し、グループによって発達過程を達成しないグループも存在しているとされている。しかし、本研究の結果では、対象グループは、一定の発達過程をたどったという結果は示さなかった。つまり、レビューした Bennis & Shepard のモデルを支持しない結果が示され、グループ間の基底的理想が質的、量的な違いとしてあらわれたのだ。そのため、本研究の仮説であるグループ発達過程は直線的なものだけではないということ、グループ間には質的・量的な違いがあるということが結果から示された。このことから、グループ発達過程は、レビューしたモデルのような直線的な発達を必ずしもたどるものではなく、グループ間に質的・量的な違いがあることが明らかになった。おそらく、各グループにおけるセッション中に見られた出来事によって基底的理想が異なり、グループ発達過程もグループによって異なって示されたと考えられる。そして、本研究を通して、グループは必ずしも直線的な発達過程をたどるものではなく、『様々な基底的理想が循環的に入れ替わり、発達していくものではないだろうか』という新たな仮説が示唆された。

既述したように、Bion (1961) は、グループの二つの心的側面を明らかにした理論を提唱した。その理論を基に様々な発達モデルが提唱されたが、Bion 自身の理論では、グループは様々な基底的理想を循環的に繰り返しながら作動グループになったりしながら、発達をしていくことが示唆されている。はじめに述べたように、グループは個人のように考えられている。そして、問題においてレビューした3つのモデルにおいても、グループも個人の発達のように固定された直線的な発達過程が存在するということが示されている。しかし、本研究を通して、グループの発達過程はグループによって異なり、さまざまな発達過程をたどるであろうことが示唆された。また、既述した3つのモデルでは、グループの発達はどのような状態で達成されるのか、また、発達が達成されたグループのその後はどうなるのかという点について示されていない。本研究では、グループの発達は作動グループになることがグループ発達の達成であると定義し、検証した。しかし、本研究の結果から、作動グループを示したグループはあったが、その後、さまざまな基底的理想グループと入れ替わる結果となったグループは少なくなかった。このことから、作動グループの難しさが示されていると考えられる。このことから、グループ発達の達成の定義を明らかにすることが、今後の研究の根本的な課題であると考えている。それを明らかにすることができない限り、グループの発達過程のモデルを示すことができないと考えているからである。また、グループの基底的理想が変化することからの、グループメンバーの関係、特に原子価による結合と、その要因によるセッション中の発言内容に大きな影響を及ぼし、発達過程の違いを示しているのではないかと新たな仮説も示唆された。そして、一方で、本研究での結果の問題点もいくつか明らかとなった。まず、基底的理想尺度を使用してグループの発達過程を測定した。そのため、質問紙を分析することによって量的な分析は行うことができたが、質的な分析をおこなったということにはならないのではないかとこの点である。次に、力動的な観点からの検証を行っていないという点である。セッションごとでの変化しか明らかに出来なかったという点である。セッション中の過程を今後明らかにし、検証していく必要があると考えられる。今後の研究によって、さらに、多くのグループを取り上げ、発達過程を明らかにしていく必要がある。

以上の問題点を考慮し、今後の研究では、グループの発達過程をさらに明らかにし、グループの発達とは何かを明らかにすること、グループ発達過程を明らかにすることを課題としたい。

参考文献

- Anzieu, D., 1984. *Le groupe et l'imaginaire groupal*. Paris: Bordas.
- Bion, W. R., 1961. *Experiences in groups and other papers*. New York: Basic Books.
- Freud, S., 1921. *Group psychology and the analysis papers*. London: Hogarth Press.
- 井村恒郎・小此木啓吾他/訳 (1970)「集団心理学と自我の分析」『フロイド著作集第6巻』人文書院
- Hafsi, M., (2004)「「愚かさ」精神分析～ピオンの観点からグループの無意識を見つめて～」京都 ナカニシヤ出版
- Hafsi, Med., (2003)「ピオンへの道標」京都 ナカニシヤ出版
- Hafsi, M., 1990. The leadership function in training groups: A psychoanalytical approach to group dynamics. *psychologia*, 33, 230-241.
- 梶山友美, (1999)「グループは発達するのか—診断グループ (Diagnostic Group) の発達過程に関する研究—」修士論文 奈良大学大学院社会学研究科
- 黒崎優美, (1998)「D-グループ (Diagnostic Group) におけるグループ過程の測定法の開発、検証、および応用」修士論文 奈良大学大学院社会学研究科
- Stock, D., & Thelen, H., 1958. *Emotional dynamics and group culture*. Wasington DC: National Training Laboratories. 佐治守夫・都留春夫・小谷英文/訳 (1996)「集団精神療法の理論」誠心書房
- Scheidtger, S., 1974. On the concept of the "Mother Group" *International Journal of Group psychotherapy*, 24: 417-418
- Schutz, W. C., 1954. Group Behavior studies, I - III. Harvard Univ.
- Schutz, W. C., 1955. What Makes Group Productive? *Human Relations*, Vol. Ⅷ, No. 4, p. 429.
- Shepard, H. A., and Bennis, W. G., 1956. A theory of group development. *Human Relations*, 9: 415-437.
- Shepard, H.A., and Bennis, W. G. 1956 A Theory of Training by Group Methods. M. I. T. mimeo; *Human Relations*, Vol. ix No. 4, pp. 403-14.
- Zurcher, L. A., 1969. Stages of development in poverty program neighborhood Committees. *Journal of Applied Behavioral Science*, 5, 223-251.

付 記

本論文を作成するにあたり、多大なる御指導を賜りました奈良大学Hafsi Med教授に心より感謝いたします。また、本研究に御協力いただいた皆様に心よりお礼申し上げます。